
真説 川中島第四次合戦之次第

富永雄太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真説 川中島第四次合戦之次第

【Nコード】

N9457A

【作者名】

富永雄太

【あらすじ】

北侵する信玄を迎え撃つために妻女山に布陣する越軍。その時の政虎の思いとは。

上杉弾正少弼政虎之場合（前書き）

理想の謙信像と信玄像は捨ててください。英雄ではなく、人間としての二人を見つめていたみました。あくまで、御話ですが。

上杉弾正少弼政虎之場合

永禄四年、八月十六日。信濃・川中島の妻女山に八千の越後兵が布陣した。

率いるは上杉弾正小弼政虎。後に軍神、聖人とも呼ばれる上杉謙信である。

前年（永禄三年）には、関東管領である、上杉 憲政を伴い北条攻めの為に関東に出兵し、十万を越える大軍を率い小田原城を包囲して見せた。

永禄四年の正月を上野・厩橋城で迎えた政虎は、昨年の秋に海津城を完成させ再び川中島を占拠し、北進の気配を見せ始めた武田徳栄軒信玄に対する警戒を強めていた。

事実、武田軍は四年六月には野尻湖付近の割ヶ嶽城を占領し、政虎の居城である春日山城へと迫った。

信玄とは川中島をめぐり已に三度争っていたが、どちらも確実な勝利を得たとは言い難い状況であった。妻女山・上杉軍中では、「今度こそは」

と、いう思いを胸の内に秘めた精強な越後兵達が、政虎の攻撃開始の下知を待っていた。眼下に臨む、海津城には武田軍の重臣・高坂弾正昌信が信玄到着を待っている。政虎が春日山を発ったという知らせはその日の内に甲斐のつづじヶ崎館へと、届けられた。多くても海津城に詰めている兵は五百ほどであるはず。今攻めかかれれば確実に落とせる。

しかし、政虎は布陣後数日経っても動かなかった。「お屋形様は何故動かん。儼に八千の兵の内三千も預けてくだされば、たちどころに海津城を落とす、信玄の首までとってみせるというに。」

海津城を見下ろす高台でそっくり放ったのは、柿崎和泉守景家である。越後軍屈指の猛将で、政虎をして「柿崎に分別があれば越後七郡は柿崎の物ぞ」

と、言わしめるほどであった。

「お屋形様には何か思うところあるのであろう。今までも我らの考えを飛び越して勝利をおさめてきたではないか。」

隣で諭すように言うのは荒河川伊豆守。彼もまた越後にその名を轟かす勇士であった。

「しかし、荒川殿。今度のお屋形様には何か、こう戦意と言うものが感じられん。決戦だと騒いでおるのは末端の兵ばかりではないか。」

それは伊豆守も感じていたことだった。本隊到着前に海津城を叩くは道理である。しかし、今まで政虎の側で神がかり的な戦を経験してきた事が伊豆守に政虎擁護の姿勢をとらせるのだった。和泉守にもそれは分かっていた。武將たちの心配をよそに政虎は書をしたためたり、琵琶を弾くなどして、日々過ごしていた。本陣に漂う空気はまるで戦の前とは程遠い空気が流れていた。動かぬまま向かえた八月十八日の夜更け。陣幕の中に

「信玄、甲府を発す。」

の報せが届いた。

「長男、太郎義信、実弟、典厩信繁などを筆頭にその数一万七千程であるということです。」

陣内にその報を届けたのは、政虎の馬廻り衆の一人、小島彌太郎である。政虎がまだ、少年の頃から側に控え、常に戦場に於いてその身を呈して政虎を守ってきた兵である。その勇猛さから、

「鬼小島」

と恐れられ、越後国内外にその名を轟かせている。

「御屋形様、今動かねば海津城の高坂弾正と信玄坊主に挟み打ちされる形となります。何卒海津を攻める命を。」

そんな彌太郎の言葉など聞こえぬかのように、政虎の目は八幡原を見つめていた。

「御屋形様。」

耐えかねたように、語気も荒く彌太郎が呼び掛ける。

「彌太郎。お主、俺に仕えて、何年になる。」

「御屋形様が幼少の頃よりお側に控えて参りました。最早時間など意味をなさない程、御屋形様の御心は理解しているつもりでございます。」

「ならば、俺の心が解らぬか。戦をすれば、数えきれぬ命が消える。夫が死ねば妻は愛^{かな}しみ、子が死ねば母は哀しむ。父が死ねば息子は仇を憎む。そんな悲しみと憎しみの連鎖に俺は虚しさを覚えるのだ。俺はもう戦に懲りたのだ。」

その告白にも動じず彌太郎が返す。

「御屋形様の御心、薄々気付いておりました。しかし、今度の戦は越後国を、ひいては越後の民を守る為にも勝たねばならぬのです。」

「信玄は越後まで攻めては来ぬ。」

その意外な言葉に彌太郎は驚いた。

「雪深い越後を獲つても、同じ雪深い山国の甲斐にはなんの易にもならぬ。信玄の欲する海は厳寒の越後の海ではなく、相模や駿河

の海よ。」

「しかし、信玄は現に北侵を続けております。」

「一度戦いに身を委ねた者に後戻りは出来ぬ。俺も信玄も、既に戻ることの出来ぬ修羅のの道に入ってしまったのだ。」

彌太郎は政虎の言葉を黙って聞いていた。それ以上に何も言えず、何も出来ないと悟ったからだ。そして政虎の口から次いで出た独り言を背中に聞きつつ、陣幕の外へ出た。憐れな青年武将を死なせてはならないという決意を更に固めながら。

「これも因果な血を継いだ故か。父上。」

政虎の目は未だ八幡原を見つめていた。まるで、避けられぬ運命を予見するかの様に。既に深夜から早朝と呼べる時間に移ってから、政虎は眠りについた。

上杉弾正少弼政虎之場合（後書き）

実は既に一度似たような内容を投稿したのですが、自分で読み返してあまりにも酷い間違いが山ほどでてきたので、申し訳ないとおもいながらも、一から書き直ささせていただきました。この場を借りて御迷惑をおかけした皆様にお詫びいたします。

急いで手持ちの資料を掘り返し書き直したのですが、間違っている部分、納得のいかない部分が沢山あると思います。どんどん指摘して下さい。次への反省材料にさせていただきます。

武田徳栄軒信玄之場合（前書き）

政虎が春日山を發つたその日の内に甲斐へと狼煙が上がる。戦国最大の激戦へ向けて風林火山の旗が立つ。

武田徳栄軒信玄之場合

「越軍、春日山城を發す」

の一報はその日の内に、信玄の本城、甲斐のつつじヶ崎館に届けられた。八月十四日の夜も更けた頃、信玄の元には武田家中の惣々たる重臣たちが集まっていた。その場の合議では、

「上杉弾正少弼撃つべし。」

と、言う意見が満場を占めた。その軍議の場で信玄は沈黙を保っていた。その心中を推しはかる事が出来る者は、武田家の数多の重臣の中でも数える程しか居なかった。下手に発言して、信玄の機嫌を損ねれば命が無いことを皆知っていたからだ。

軍議が終わり、それぞれが退散した後、信玄の周りに控えて居るのは、長男・太郎義信、実弟・典厩信繁、飯富虎昌ら、信玄の寵臣たちであった。

「父上、直ぐにでも甲斐を發ちませぬと、間に合ひませぬ。海津に詰めている兵数は五百程。一万三千の越軍に今攻めこまれてはひとたまりもありません。」

義信の声には若く凛とした、氣力に満ち溢れていた。

そんな義信の提言を茶化すように、飯富虎昌が口を挟む。

「御曹司の言われることもつともなり。この調子ならば武田の行く末は安泰におやじございますなあ、御屋形殿。」

周りから笑い声が洩れだし、義信が赤面しながら周囲をにらみつける。

そんな様子に信玄も苦笑する。

「御屋形様は政虎の出方を待つて御られるのですよ、御曹司。それに海津を取り仕切るは高坂弾正殿。如何に政虎と云えどもそう簡単には落とせますまい。」

唐突に室内に響いた声にその場の全員が後ろに目をやる。

「来たか、勘助。」

突然の訪問者に動ずる様子もなく、信玄が声を掛ける。訪問者の名は山本勘助。後世では名軍師として、名高い。現在は出家し、山本道鬼斎勘助と号している。隻眼で、片足を引きずりながら歩く姿には、無言の迫力があつた。しかし、その場の重臣たちの瞳には明らかな侮蔑の色が浮かんでいた。勘助はさも当然であるかの様に信玄の隣に控えた。

「政虎はどう出てくるか、勘助。」

「恐らく今度の行軍の目的は全面対決ではありませんまい。ここですらに兵力を消耗しても政虎には得るものはございませぬ。」

「しかし、政虎は義に厚く情けを知る将と聞く。村上や高梨らの訴えに应じての出陣ではないのか。道鬼斎殿。」

半囁みつくように反論したのは穴山信君である。

「それに川中島は政虎が居城、春日山の目と鼻の先。海津の存在は政虎にとって目障りであらう。」

穴山の言葉に便乗したのは内藤昌豊。武田四名臣に数えられる程の名将である。

「かつかつ。まあ、皆そう道鬼殿をいじめるな。ここは一つ

御屋形殿の意見も交えて考えてみようではないか。」

空気の悪くなった場を和ませるような笑い声をたてて発言したのは馬場美濃守信春である。生涯六十余度の合戦に参戦しながら、かすり傷一つ負わず、

「不死身の鬼美濃」

と讃えられた名将であつた。

「某も是非とも兄上の考えをお聞きたい。今度の政虎の出陣の狙いとは。」

信玄の実弟・典厩信繁も美濃守の言葉を継ぐ。

「政虎は儼と本気で事を構えるつもりはあるまい。政虎の狙いは川中島を一定期間占拠し、その領有権を主張すると共に我等に対して警告を発する事よ。」

重臣たちのやりとりを黙って見ていた信玄が重い口を開いた。

「警告とは。」

信玄の言葉の意味を理解しかねるかの様に義信が問う。

「これ以上北に進めば容赦せぬ、という事じゃ。村上や高梨からの要請に応じたかのように見せるは建前よ。」

飯富、馬場、内藤、山本、信繁らはその答えに満足したかのよう
に頷く。

「しかし、父上。依然、海津が危うい事に変わりはありません。」

「太郎。いつも教えているだろう。戦などせぬ方がよいのじゃ。」

どうしても避けられぬ時には戦の前に勝利を決めよ。槍を合わせる、弓矢を射合うなどということは事後処理に過ぎぬのだ。」

その答えに返事はするものの、不満の残る表情の義信であった。

「信繁、政虎との戦今度で何度目かの。」

「以前に三度。今度で四度目になります。」

「思えば最初、あれに粉をかけたのが間違いだったのかも知れぬ。将来目障りにならぬように、越後に押し込めようとしたことが裏目に出た。あの頃はまだまだ儂も若かったという事か。」

自嘲的な信玄の言葉に皆聞きいていた。

「十八日には館を出る。飯富、馬場。兵たちに戦の支度をさせよ。内藤は海津の高坂に案ずるなど伝えよ。他の諸将も今夜より支度を整えよ。」

「承った」

というような旨をそれぞれ口にして、信玄の前から下がった。

室内には信玄、信繁、義信、勘助だけが残った。

「一度戦に身を委ねれば抜けられぬか。因果な血よな。」

信玄の独白にそれぞれ思いを廻らせながら、義信たちも、信玄の前から下がった。

二日後、

「上杉軍川中島に到着、妻女山を占拠」

の知らせが届けられたが、信玄は別段急ぐ事もなく、近隣の神社に戦勝祈願を行うなどして、時を過ごした。

来る八月十八日。予定通り行軍の支度を整えた兵たちが信玄の元に集結した。目指す川中島から吹いてくる風に、風林火山の旗がたなびく。戦国最強と恐れられた、武田軍団が今甲斐を發した。

武田徳栄軒信玄之場合（後書き）

なんとか二話目を投稿することができました。一話目を読んでくれた皆様、そして今二話目を読み終えた皆様。本当にありがとうございます。いきました。

唐突ですが、私は新潟県の出身です。地元を上杉謙信の様な有名不精が居たことは大変誇らしい事ですが、今回の真説は戦国時代を代表する二人に光を当てたものなので、どうしても、謙信よりで書いてしまう自分にはがゆかったりします。次回も読んでやってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9457a/>

真説 川中島第四次合戦之次第

2010年10月10日06時08分発行